



Special Pamphletを作ろう!

鳴門教育大学附属小学校

青山祥子先生・Christopher B.Prowant 先生 ~~×~~ 5年1組 (児童数33名)

新しい学習指導要領では、「聞く」「話す」に加え、「読む」「書く」を含めたコミュニケーション能力の育成が求められています。

徳島県徳島市にある鳴門教育大学附属小学校では、3・4年生で英語の音声に慣れ親しむ活動を行い、5年生から「読むこと・書くこと」を取り入れた活動も行っています。今回は、「先生を紹介する文を英語でつくる」という5年生の授業をご紹介します。

明るい英語学習室

“Good morning, Chris!”

“Asuka, good morning!”

英語学習室に入ってきた子どもたちは、自分のファーストネームが書かれた名札を胸に付け、教室の入り口に立つALTのクリス先生と、元気よく挨拶を交わす。中には、先生とハイタッチ



子どもたちの人気者、ALTのクリス先生。

をする子も。とても仲が良さそうだ。全員が席に着き始業の時間になると、クリス先生は、

“Good morning! Are you ready?”

と笑顔で投げかけた。すると、全員が

“OK ! Let's start English class!”

と、声を合わせて元気よく答え、今日の授業がスタート。

“How are you?”とクリス先生が尋ねると、

“I’m happy!”, “I’m cold!”, “I’m hungry!”

と、子どもたちが次々と挙手して答える。クリス先生は笑顔で、必ず子どもたちのファーストネームを呼んで指名する。みんな、先生が大好きなので、うれしそうだ。

続いて、“What day is it today?” “What’s the date today?” と、今日の曜日と日付を確認し、いよいよ本題に入る。



教室の後ろから、授業の進行を見守る青山先生。

ど う す る ？ 小 学 校 英 語

2020年度に小学校で英語が教科化されるのを前に、

「これまでの外国語活動とどう変わるの？」

「どのように指導していったらよいの?」と、疑問をもたれている先生も多いことでしょう。

本特集では、そのヒントとなるような小学校の授業をご紹介します。

そして、これまでの外国語活動との違いを、

元・文部科学省 初等中等教育局教科書調査官のこいずみまさし小泉仁先生に、
詳しくお聞きます。

撮影：鈴木俊介

単元名 My Friends, My School —日本の学校を伝えよう—

目標

- 既習の英語表現を活用して、友達や外国人と積極に関わることができる。
- 既習の英語表現を活用して、外国人に日本の学校を紹介したり、パンフレット作りの中で、英語を書いたりしようとする。
- オーストラリアの文化や言語に興味をもち、日本と比較し、共通点や相違点を感じることができる。

準備するもの

児童：筆記具、ノート、
My Language Passport (※)
教師：ホワイトボード、文字カード、
ワークシート、電子黒板、
パワーポイント

指導計画(全7時間)

第1次 オーストラリアの友達を知る(1時間)

オーストラリアの姉妹校(クイーンズランド州ギルストン小学校5年生)に送ったインタビューシートの返事(英語)を、辞書で調べたりALTに質問したりしながら読み、自分たちの生活と似ているところや違うところを知る。

第2次 パンフレット作りをする(5時間)

自分や学校のことを伝えるために、「自分の1日のスケジュール」「自分の好きな時間」「時間割」「学校の先生」を紹介するパンフレットを作る。

第3次 交流会をする(1時間)

姉妹校の友達とスカイプで交流会を行う。(姉妹校の児童は日本語を学んでいる。)

※My Language Passport

児童の自己評価と習熟度確認のための冊子。鳴門教育大学小学校英語教育センターが、文部科学省のCAN-DOリストをもとに作成した。附属小学校の児童はこの冊子を持参して授業を受ける。



Who am I ?

“We are making the special pamphlet, right?”と、クリス先生は切り出した。

本単元では、オーストラリアの姉妹校に、自分たちの学校を紹介するためのパンフレットを作る(左の「指導計画」参照)。子どもたちは、前時までに、「自分の1日のスケジュール」や「時間割」を紹介するページを作成している。本時では、「先生」を紹介するページを作る。

クリス先生は、“Today is the teacher’s page. So, we should practice.”と言い、電子黒板に“this is Mr. _____.”というスライド(図1)を表示した。

クリス Can you read it?

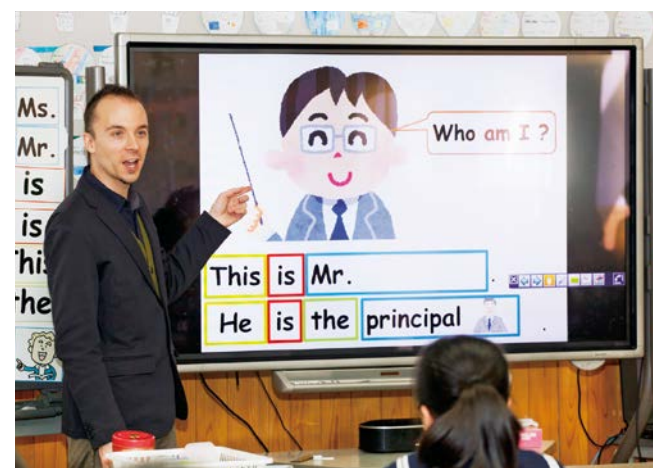
児童1 This is Mr. (ゆっくり読み上げる)

児童2 Mr. Chris!

青山 どうしてそう思うの?

児童2 ミスターだからクリスかなと思って。男の人でしょ?

青山 そう、よく気がついたね。



いい気づきをする子どもがいたり、適宜、青山先生が入り、その発言を取り上げて褒める。

続けてクリス先生は、“He is the principal.”という文章(図2)を表示。“principal”を指して、“What’s this?”と尋ねた。初出の単語にとまどう子どもたち。しかし、男の先生であることと、未習の単語であることから予想して、ある児童が「校長先生?」とつぶやいた。すかさずクリス先生が、“Very good! You are smart!”と褒め、“principal”を全員で発音練習した。

そして、次のスライド(図3)を表示して、“Who is he?”と投げかけると、子どもたちは「安田先生!」と校長先生の名前を答える。クリス先生が、校長先生の写真(図4)を表示すると、「おお」と歓声が上がって笑顔に。その後、“This is Mr. Yasuda. He is the principal.”と音読をした。

同様に、教頭先生(vice-principal)についても、スライドを使って音読していく。“She is the vice-principal.”と音読したとき、青山先生が「vの発音は難しいよ。クリスの口元に注目してね。One more time, please.」と言うと、クリス先生はもう一度、“She is the vice-principal.”と範読し、viceを発音するときに、唇に指を当てて、子どもたちに注意を促した。

教頭先生の名前は、“Ms. Fujishima”。青山先生が、「ローマ字、ちゃんと覚えているかな。『ふ』は、Huじゃなくて、Fuだよ」と言うと、クリス先生が、“In English, we usually say Fujishima.”とFを強調して発音。子どもたちもそれに続いて音読した。

授業の進行はクリス先生が行うが、子どもたちが間違えやすいところは、青山先生が適宜入り、日本語できちんと説明する。そして、それを補完するようにクリス先生が英語で発音。絶妙なチームプレーだ。



授業で使ったスライド

電子黒板に映すスライドはすべて青山先生の手作り。

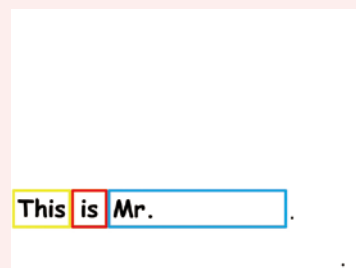


図1

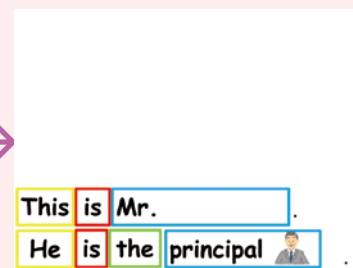


図2

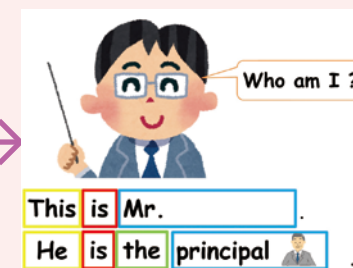


図3



図4

教科の名前を復習しよう

“Now, let's review the subject.”

クリス先生はそう言い、既習の「subject(教科)」を、スライドで順に映していった。

“Japanese!”, “Science!”などと、子どもたちは自信たっぷりに読み上げていく。ひと通り教科名を言い終えた後、

“Let's play the matching game!”

とクリス先生は言い、カードを配付。本日の“matching game”は、教科のイラストが描かれたカードと、英語の教科名が書かれたカードを合わせるという内容。子どもたちは、教科名を学習したときに、このゲームをしたことがあるのでルールは心得ている。今回は、新たに“principal”“vice-principal”“school nurse(保健の先生)”というカードが加わる。

青山先生は、机を回って子どもたちがゲームの準備ができているのを確認し、クリス先生にOKの合図を出す。

“Are you ready? Start!”



と先生が言うと、子どもたちはいっせいにカードを手にする。制限時間は2分。表情は真剣そのものだ。

青山先生が「声に出して読みながら、カードを置こうね」と言うと、「社会はsocial studies, 美術はart……」などと楽しそうに英語を読み、カードを合わせて置いていく。1分半を過ぎると、「できた!」という声が聞こえ始め、2分過ぎたところで、タイムアップ。全員がカードを置き終わったことを確認し、青山先生はカードを集めるよう指示。机を回って、子どもたちが片付け終わったのを確認すると、

“Please look at the screen.”

と、クリス先生のほうを指さした。



イラストと、英語の教科名を合わせる“matching game”。楽しみながら、自然と英語を読み、カードを合わせて置いていく。カードはすべて青山先生の手作りだ。



Mr. それともMs.? He それとも She?

“OK. Part 2!”

とクリス先生は言い、電子黒板にスライド(図5)を表示した。先ほどのスライドと同じように見えるが、“Mr. ____”と“He”の入る部分が空欄になっている。

クリス Please look at the words. This is...

(と言いながら、This is の後ろを指さす)

児童3 Mr.

児童4 Ms.

クリス (目を丸くして)Ms. ?!

児童4 (慌てて)Mr. !

児童一同 笑い

クリス This is Mr.Yasuda. Then... (と言いながら、2行目の空欄を指さす)

児童5 He!

クリス He is the principal.

次に、教頭先生のスライド(図6)を映す。女性なので“Ms.”“She”を使うことを確認するが、ときどき“Mr.”や“He”と言い間違える子どもがいて、そのつど盛り上がる。その後、各教科の先生(本校では高学年で教科担任制をとっている)を確認していく。

体育の先生のスライド(図7)が映し出されると、楽しいポーズをとる先生の写真に、子どもたちは大爆笑。国語の先生、理科の先生……と、身近な先生の写真が画面に大きく映し出されるたび、子どもたちは大喜び。音読する声もどんどん大きくなり、教室は熱気を帯びていく。

全教科の先生の確認が終わったところで、青山先生が、“Today, be careful, about he or she, Mr. or Ms.”とまとめた。すると、ある子がおどけて、“Ms.Chris?”と言うと、クリス先生が“No! Be careful!”と言い、教室は笑いに包まれた。



授業の要所で、青山先生が入って補足説明する。

授業で使ったスライド



図5 校長先生



図6 教頭先生

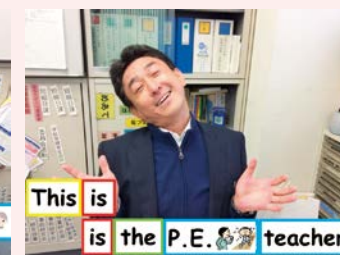


図7 体育の先生

先生を紹介する文を書こう

いよいよ、先生を紹介するページを作る。好きな先生を一人選び、

This is _____.
____ is the _____.

の文を作って、先生の写真を貼ったワークシートに書く。子どもたちは、「どの先生にしようかな」と、書きたくてうずうずしている様子。

しかし、音読はスムーズにできても、英文を書くことは、子どもたちにとってハードルが高い。そこで、先生は細かくステップを踏んで、文を書かせることにした。その手順はこうだ。

①みんなでいっしょに文を作る

全員で、クリス先生といっしょに文字カードを並べ替えて文を作る。

②各自でカードを並べ替えて文を作る

小さなホワイトボードと文字カードをもらい、各自でカードを並べ替えて文を作る。先生の名前は自分で書く。ローマ字表記が不安な子は、青山先生からローマ字表を借りる。

③青山先生のチェックを受ける

ホワイトボードに文が作れたら、青山先生にチェックしてもらおう。OKが出たら、紹介する先生の写真とワークシートをもらう。

④ワークシートに書き写す

ワークシートに先生の写真を貼り、ホワイトボードで作った文をそのまま書き写す。

子どもたちがつまづかないよう、いきなりワークシートに英文を書かせるのではなく、まず文字カードを並べて文を作り、それを書き写す、という段階を踏ませた。

②では、文字カードを並べ替えるまでは順調だが、先生の名前をローマ字で書くところで、迷っている子がちらほら見られる。青山先生は、子どもの横に寄り添って、ローマ字表を見ながら、いっしょにどう表記したらよいか考える。いっぽう、クリス先生は教室を回り、スペルミスを指導したり、名前の最初のアファベットを小文字にしている子に大文字にするよう伝えたりする。二人の先生が、うまく役割分担をして机間指導を行うことで、どの子も徐々にワークシートを完成させていった。

④まで進んだら、ワークシートに書いた英文をクリス先生の前で読む。先生は、"Good job!"



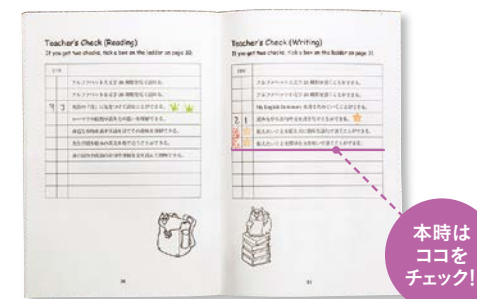
紹介文を書いたワークシートをクリス先生が確認。



できたパンフレットを広げて、会心の笑み。

"Perfect!"と、一人一人を褒めながら、「My Language Passport」※にスタンプを押す。子どもたちは照れながらもうれしそうだ。いつしか子どもたちがクリス先生を取り囲み、教室はいっそうにぎやかになる。

クリス先生のチェックが済んだ子どもたちは、



※P4でご紹介した「My Language Passport」には、Teacher's Checkというページがあり、児童が授業の目標を達成していたら、教師がスタンプを押す。

これまで作ってきたパンフレットに、本時で作ったページを、マスキングテープで貼り付ける。これで、パンフレットが完成。子どもたちは、できたパンフレットを広げ、満足そうな表情を浮かべている。

そして、そろそろ授業が終わりに近づく。青山先生は“Let's start the final activity.”と投げかけ、本時で学習した英文と絵を結ぶ設問と、自己評価欄のあるプリントに取り組みさせた。子どもたちは黙々と鉛筆を走らせる。答え合わせが終わったところで、終業の時間。

“That's all for today. See you!”

“Thank you!”

と、二人の先生が言うと、子どもたちも元気よく“See you!”と応じ、笑顔で教室を後にした。

本時の「書く活動」の流れ



①みんなでいっしょに文を作る

全員で“This is Mr.Chris. He is the English teacher.”という文を作る。



②各自でカードを並べ替えて文を作る

手元のホワイトボードで、カードを並べ替えて文を完成させる。先生の名前はマーカーで書く。



③青山先生のチェックを受ける

自分の作った文を、青山先生に確認してもらう。



④ワークシートに書き写す

ホワイトボードで作った文を、先生の写真を貼ったワークシートに書き写す。



先生の紹介ページが完成!

保健の先生を選んだ児童の作品。
“This is Ms.Saito.
She is the school nurse.”という英文の他に、先生の紹介文を日本語で追記している。

授業を終えて

子どものモチベーションを大切に

今回、三人称を取り上げたいと思い、子どもたちに身近な「先生」を題材にしました。でも、みんなで同じ先生を紹介するのではなく、「自分の好きな先生を選んで紹介する」ことにしました。そのほうが、子どもたちの「書きたい」という意欲を引き出せると思ったからです。

私は、英語を教えるうえで、子どもたちのモチベーションを第一に考えています。中学年の頃は、友達と英語で話せただけで満足するのですが、高学年になると、外国人に本当に伝わったかどうかということも気にし始めます。ですから、この単元でも、最後にオーストラリアの姉妹校との交流学習を設定しました。

いつも指導案は私が考え、必ずクリス先生と事前打ち合わせをします。授業が始まったら、進行はクリス先生にお任せし、私は子どもの反応を見ながら、英語や日本語で補足説明をし、授業についてこれない子が出ないよう気を配ります。クリス先生と教えるようになって2年になりますが、日に日にうまく役割分担しながら、授業が進んでいると感じています。(談)



青山祥子

あおやま・しょうこ
鳴門教育大学附属小学校教諭。
徳島県生まれ。大学卒業後、公立校勤務を経て、2013年より現職。鳴門教育大学小学校英語教育センターとの共同研究に携わる。

Good Relationship & Teamwork

私が、子どもたちに英語を教えるときにいちばん大事にしているのはコミュニケーションです。そのため、英語の授業が始まる前、必ず教室の入口に立ち、入ってくる子どもたちと笑顔で挨拶を交わすようにしています。また、子どもたちとは、普段からファーストネームで呼び合うようにもしています。

授業は二人で行いますが、指導のプランはすべて、青山先生が考えてくれます。彼女がいいプランを考えてくれるので、授業をするのがとても楽しいですよ。

授業の前に必ず打ち合わせをしますが、青山先生がいつも「何かアイデアはある？どんなアクティビティをしたらいいと思う？」と尋ねてくれるので、よく二人で話し合います。普段から信頼関係が築けているので、授業もいいチームワークで進めることができ、とてもスムーズですよ。Good Relationship & Teamwork——これが日本人の先生とALTがいっしょに授業をするとき、最も大事なことだと私は思っています。(談)



Christopher B. Prowant

クリストファー・プロワント
鳴門教育大学附属小学校・中学校のALTを務める。
米国オレゴン州生まれ。2011年に来日。英会話教室や高専での講師などを経て、2015年より現職。

授業を参観して

鳴門教育大学附属小学校へ、英語の指導に入られている畑江美佳先生に、今回の授業を参観していただきました。

「伝える」ための読み書き指導

今 回の青山先生の授業では、2020年度から始まる、文字指導を含めた小学校外国語をイメージしていただけたのではないのでしょうか。私が所属する鳴門教育大学小学校英語教育センターと附属小学校英語科は4年目となる共同研究の中で、新しい学習指導要領に含まれる、「コミュニケーションを行う目的や場面、状況に応じて、身近で簡単な事柄について、聞いたり話したりするとともに、音声で十分に慣れ親しんだ外国語の語彙や基本的な表現を推測しながら読んだり、語順を意識しながら書いたりして、自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができる」という目標の具現化を目指しています。

本単元で扱った教科名、This is ～. He (She) is ～. は、今後、5年生の指導内容に含まれるとされています。青山先生は、新出語彙や表現の指導は必ず音声から入り、時間を置かずに文字も提示し、その意味や文構造は決して教え込まず、児童自らが気づくように工夫しています。3・4

年生の興味を引く方法で大文字・小文字を指導し、5年生の4月から音声と文字とを関連付けて指導したことにより、情報を得るために文字を読む「すべ」を知り、自分の想いを伝えるために書くことを知った児童は、5年生の後半から、積極的に深い学びを得るようになりました。

また、読み書きは単調な個人作業に陥りやすいため、授業では必ず「相手意識」をもたせ、誰かに「伝える」ために読んだり書いたりする仕掛けを施すことを徹底しています。英語で伝える相手は、海外の交流校の子どもたちでも身近なALTでもいいと思います。

そして、単元の目標設定から最後の学習成果までを系統的に積み上げる「My Language Passport」(P4参照)の活用は、4技能+異文化理解の自己評価、そして教師の評価指標にもなります。この活用により、児童が目標をもって英語に取り組み、その達成度が可視化されることで次の目標に繋げ、卒業時には、自信をもって中学校の先生に渡す「パスポート」となることを期待しています。



畑江美佳

はたえ・みか
鳴門教育大学准教授。東京生まれ、秋田育ち。米国カリフォルニア州の高等学校を卒業後、日本大学文理学部文学専攻(英文学)、同大学院総合社会情報研究科修士課程・博士課程修了。鶴岡工業高等専門学校 准教授などを経て、2012年4月より現職。専門は英語教育学。

